

筑波大学留学生センターにおける学習者のニーズ分析

—J500-900「書く」の場合—

劉 雅静 木戸 光子

要 旨

本稿は筑波大学留学生センターで実施したニーズ調査の一環として行った、中上級クラスにおける「書く」技能に関する調査の結果報告である。調査結果として、①学習者の学習動機はアカデミック的な学習動機と実用的な学習動機の双方が観察された、②全体的な傾向として「語彙」「文法」「使い分け」が難しいといった回答が多かったが、レベル別や身分別によってばらつきが見られた、③「語彙」が難しいという回答数が「文法」や「文章の書き方」の回答数を上回っており、学習者の語彙力、特に文章運用の中での語彙力を強化する必要がある、などが明らかになった。

【キーワード】 ニーズ調査 中上級 「書く」 作文 学習動機 習得難易度

A Learner Needs Analysis for the Intermediate and Advanced “Writing” Classes (J500-900) at the International Student Center of the University of Tsukuba

LIU Yajing, KIDO Mitsuko

【Abstract】 This paper reports on the results of an investigation of learning motivations and difficulties for intermediate and advanced learners of Japanese concerning “writing”. In this paper we report that: (1) both academic and practical motivation are observed for intermediate and advanced learners of Japanese, (2) to learn about “vocabulary,” “grammar,” and “selection” is difficult for intermediate and advanced learners, but variation according to level and status was seen, and (3) it is necessary to improve students’ vocabulary knowledge.

【Keywords】 Need analysis, intermediate-advanced level, “writing”, composition, learning motivation, learning difficulty

1. 概要

本調査の対象は、筑波大学留学生センターにおいて日本語補講コースを履修する学生である。補講コースは、ゼロスタートのJ100から最上級のJ900まで、9レベルのクラスがある。本稿では、J100-400を初級、J500-900を中上級と呼ぶ。ニーズ調査の概要や調査紙の回収結果は、本誌所収の「筑波大学留学生センター日本語補講コースにおける学習者のニーズ調査の概要」(関崎 2012)を参照されたい。調査紙には、学習者の学習目的や学習者が抱えている困難点といった質問内容が設けられた。本稿は、学習者のニーズ調査の中で、中上級学習者(J500-900)の「書く」のニーズを分析した結果を報告することを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。2節において、回答者のプロフィールの集計結果(2.1節)および調査結果の分析方法(2.2節)、3節において調査の結果、4節において本稿のまとめについて述べる。

2. 回答者のプロフィールおよび調査結果の分析方法

2.1 回答者のプロフィール

ニーズ調査の調査紙では、アンケート回答者の属性に関する調査項目は全5項目(「書く」レベル、国籍、身分、所属、日本滞在歴)からなる。中上級(J500-900)の補講受講

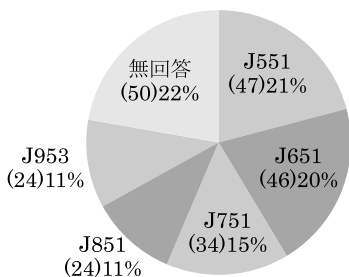


図1 「書く」レベル別回答数

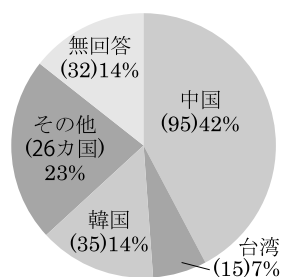


図2 国籍別回答数

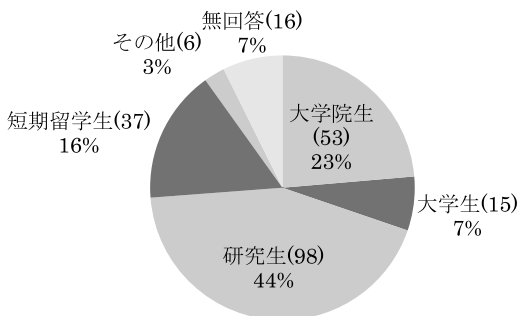


図3 身分別回答数

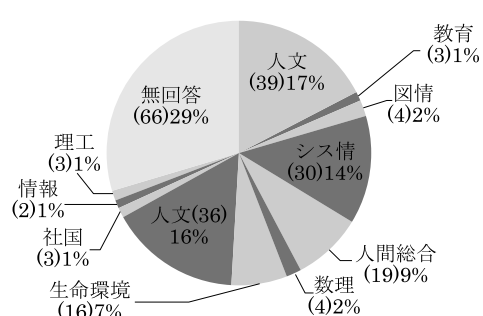
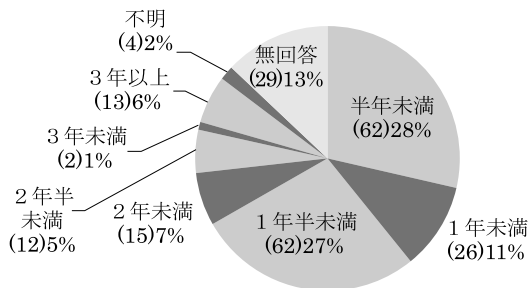


図4 所属別回答数



者225名の属性別の集計結果を図1～図5に示す。図の()内の数値は回答者の実数である。()右の数値は割合を示す。

図5 滞在歴別回答数

2.2 調査結果の分析方法

中上級の補講受講者を調査対象に集計したニーズ調査のアンケート数は225人分であった。調査結果を分析するにあたって、本稿では、形態素解析による数量化の方法と記述内容の質的分析によるカテゴリー作成の方法を用いて2段階に分けてアンケートの結果を分析する試みを行った。

アンケートの結果を集計する際に、補講受講者の回答内容の傾向性を見出すため、「キーワードの抽出」→「カテゴリーの設定」という分析手順に従って、アンケート結果のカテゴリー化を行った。以下では、調査結果の分析手順を追って説明する。

手順①：キーワードの抽出

ニーズ調査のアンケート結果を分析する第一歩の試みとして、まずキーワード出現頻度解析ソフト¹を利用し、形態素解析による数量化の方法を用いて、アンケート結果におけるキーワードの抽出作業を行った。キーワードを抽出することによってある程度の回答傾向が予測できた。しかし、今回のニーズ調査のアンケートは回答内容の記述分量がそれほど膨大な量ではないため、キーワード出現頻度解析ソフトの効力を十分に発揮したとは言えない。キーワードの出現頻度を把握した上で、当該のキーワードがその前後文脈の中でどういう意味で使われているのかを確認するため、次の分析段階での分析手順として、以下の手順②で示すようなアンケート調査者による記述内容の質的な分析作業を行った。

手順②：カテゴリーの設定

アンケートの結果をできるだけ網羅的に集計するため、キーワード出現頻度解析ソフトによって抽出したキーワードを手掛かりにしながら、調査者によるアンケート結果への再確認を行い、回答内容のカテゴリー化を行った。

今回のニーズ調査において、「書く」の場合に関して中上級 (J500-900) の補講受講者に次の2つの質問について回答を書いてもらった。

Q1 : あなたは今、どんな場面で、何をするために「書く」練習をする必要がありますか。必要性の高いものをできるだけ具体的に書いてください。

Q2 : その場で「書く」時に難しいと思うことは何ですか？

以上の2つの質問に対する記述内容をカテゴリー化した結果は以下の通りである。

Q1 : 何をするために「書く」練習をする必要があるか。

(1) 能力アップ

(A) コミュニケーション能力の向上

手紙 (はがき、年賀状も含む) やメール (特に先生へ) を書く

(B) 文法の応用力の向上

(C) 文章力の向上

(2) テクニックの習得

(D) 文章 (内容別) の作成

研究関係 : 研究論文 (レポート、発表、プレゼンを含む) ・論文要旨・研究計画書・要約

試験関係 : 入試の小論文、志願理由書

日常関係 : 申請書、エッセイ、日記

就職関係 : 履歴書、自己PR

(E) 論理的な文章の書き方

(F) 書き言葉の習得

起承転結に使う書き言葉、話し言葉と書き言葉の使い分け

Q2 : 難しいと思うことは何か。

(1) 語彙と文法の運用

(G) 語彙

語彙量、語彙の用法 (熟語、慣用表現、副詞、接続詞、専門用語、適切な語彙の選択、外来語、手紙用語、文章用語、助詞、接続助詞、自他動詞)、漢字 (書き方、音読み&訓読み)

(H) 文法

正確さ、文法項目（助詞の使い分け、テンス、使役、受動）、長文、複雑な文型、文末表現、敬語など

(2) 文章の書き方と表現

(I) 書き方（内容別）

先生へのメールや手紙、研究関係、日常関係、就職関係

(J) 日本語らしさ

日本語らしい日本語を書きたい、言いたいことや考えていることをきちんと伝えたい

(K) 使い分け

話し言葉と書き言葉の使い分け、類似表現の使い分け、場面による表現の使い分け（表現の多様さ、文体の使い分け）

(L) テクニック

簡潔でシンプルに書きたい（簡潔さ）、論理的に書きたい（論理性）、文章の書式や構造（文章のつなげ方、手紙やはがきの書式）

その他：Q1、Q2に該当しない回答やどの項目に当てはまるか判定しにくい回答など

Q1に対する回答内容は、「能力アップ」と「テクニックの習得」という2つのカテゴリーにまとめられた。前者は具体的な学習要望に言及せず、コミュニケーション能力や文法の応用力、文章力を高めるためにと回答した類のものである。後者は具体的な学習目的を回答したものである。「能力アップ」と「テクニックの習得」のカテゴリーの中で具体的な回答内容によってそれぞれ3つの下位カテゴリーが設けられた。一方、Q2に対する回答は、「語彙と文法の運用」と「文章の書き方と表現」という2つのカテゴリーにまとめられた。前者は語彙や文法にかかわる回答内容の類であるが、後者は文章の書き方や表現にかかわる回答内容の類である。「語彙と文法の運用」というカテゴリーの中では2つの下位カテゴリーが、「文章の書き方と表現」というカテゴリーの中では4つの下位カテゴリーが設けられた。

Q1とQ2に対する回答内容のカテゴリー項目は次の表1のようにまとめられる。

表1 「書く」場合のQ1とQ2に対する回答内容のカテゴリー項目

Q1						Q2					
能力アップ			テクニックの習得			語彙と文法の運用		文章の書き方と表現			
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
コミュニケーション力	文法の応用力	文章力	文章の作成	論理的な書き方	書き言葉の習得	語彙	文法	書き方	日本語らしさ	使い分け	テクニック

本節で述べたような分析手法を用いて、J500-900「書く」場合のニーズ調査のアンケートを集計・考察した結果は次節で述べることにする。

3. 調査の結果

3.1 カテゴリー別から見た結果

ニーズ調査のアンケート結果をカテゴリー別に集計した合計数を次の表2に示す。

表2 カテゴリーの設定および回答の集計結果

書くレベル	Q1														Q2														その他																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
	能力アップ				テクニックの習得								語彙と文法の運用				文章の書き方と表現																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
	(A)コミュニケーション力		(B)文法の応用力	(C)文章力	(D)文章(内容別)の作成						(E)論理的な書き方	(F)書き言葉の習得	(G)語彙		(H)文法	①書き方					(J)日本語らしさ	(K)使い分け			(L)テクニック																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
	手紙	メール			研究論文	論文要旨	計画書	要約	日常関係	就職関係			試験関係	語彙量		用法	漢字	メール	手紙	研究関係		日常関係	就職関係	書言葉と話言葉	類似表現	場面別	簡潔さ	論理的		文章の構成や書式																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										

3.1.1 学習動機

表2の「合計」欄が示すように、「何をするために」という学習者の学習目的を尋ねる質問(Q1)に対する回答として、回答数が最も多い上位3項目の回答は「(D)文章の作

成」、「(A) コミュニケーション能力の向上」、「(C) 文章力の向上」である。その中で、「(D) 文章の作成」というカテゴリーは研究関係（研究論文、論文要旨、計画書、要約などを含む）、日常関係、就職関係、試験関係の論文や書類を書くために「書く」練習が必要だと回答したものである。「(A) コミュニケーション能力の向上」というカテゴリーはコミュニケーションの手段とする手紙やメールを書くために「書く」練習が必要だと回答したものである。「(C) 文章力の向上」というカテゴリーは大まかに文章力の向上に「書く」練習が必要だと回答したものである。

学習動機という観点から見れば、うまく文章（研究論文など）を書けるようになるために「書く」練習をする必要があるという認識を持つ受講者の数が最も多い。来日留学の学生にとって、日頃の学校生活や日常生活の中で、研究論文やレポート（受験時の小論文などを含む）、申請書類、履歴書などを書くことが必要とされるからだと考えられる。受講者はこのような文章を書く能力を高めたいという学習動機を持つ一方、先生や友達とメールや手紙で連絡をとる際に、円滑なコミュニケーションを図るためにも「書く」練習が必要だという認識も持っているようである。

このような考察結果から、「書く」練習の学習動機はアカデミックな要素と実用的な要素の両方が関わっていると言える。

3. 1. 2 学習難易度

表2で示すように、「何が難しいか」という学習者が抱えている問題に関する質問（Q2）に対する回答として、回答数が最も多い上位3項目の回答は「(G) 語彙」、「(H) 文法」、「(K) 使い分け」である。「(G) 語彙」というカテゴリーの中には、①語彙量が不足している、②専門用語や手紙用語、慣用表現といった語彙の用法が難しい、③漢字の書き方や読み方が難しいという3つの回答内容が含まれている。「(H) 文法」というカテゴリーは各種の文法項目の運用が難しいと回答したものである。「(K) 使い分け」というカテゴリーの中には、①話し言葉と書き言葉の使い分け、②類似表現の使い分け、③場面による表現の使い分けの3つの回答内容が含まれている。

「何が難しいか」という質問に対して、文章の書き方やテクニックというより、語彙や文法、言葉の使い分け、日本語らしさと回答したものが多かった。その理由としては、文章の簡潔さや論理性、構成、書式といった文章力の向上を求める前に、受講者が直面する課題として、如何に語彙や文法を習得し、適切に運用できるかということが考えられる。このことは、日本語で文章を書く際に、自分たちの日本語能力が限られており、言いたいことを正確にうまく伝えられないといったアンケートの回答が複数あったことから窺える。ただし、次節で述べるように、受講者の「書く」レベルによって回答にばらつきが見られた。

3.2 レベル別に見た結果

「書く」レベル別による補講受講者の回答内容を比較するため、J500-900中上級の225名の補講受講者のレベルを「中級前期」「中級後期」「上級」の3つに区分した。J500-900のうち、J551とJ651は「中級前期」レベルに相当し、合計93人である。J751とJ851は「中級後期」レベルに相当し、合計58人である。また、「上級」レベルであるJ953は24人である。属性調査表にレベルを記入しなかった回答数は50件あったが、今回の考察対象から除外する。

中上級の補講受講者225名の「書く」レベルによる回答内容を集計した結果を表3に示す。

表3 レベル別に見たアンケートの結果

回答内容 回答人数	Q 1						Q 2					
	能力アップ			テクニック			語彙と文法		書き方と表現			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
J551 (47人)	20	7	10	41	1	2	17	12	11	4	11	6
J651 (46人)	5	3	7	36	4	6	16	8	3	9	15	9
中級前期 (93人)	25	10	17	77	5	8	33	20	14	13	26	15
割合 (%)	26.9	10.8	18.3	82.8	5.4	8.6	35.5	21.5	15.1	14.0	28.0	16.1
J751 (34人)	12	5	3	34	2	3	12	8	7	6	14	7
J851 (24人)	10	1	0	21	1	1	6	8	2	8	4	1
中級後期 (58人)	22	6	3	55	3	4	18	16	9	14	18	8
割合 (%)	37.9	10.3	5.2	94.8	5.2	6.9	31.0	27.6	15.5	24.1	31.0	13.8
J953 (24人)	5	3	3	31	0	0	9	9	2	4	6	6
上級 (24人)	5	3	3	31	0	0	9	9	2	4	6	6
割合 (%)	20.8	12.5	12.5	129.2	0	0	37.5	37.5	8.3	16.7	25	25
無回答 (50人)	4	1	3	21	0	2	5	11	1	6	3	3
合計 : 225人	56	20	26	184	8	14	65	56	26	37	53	32
割合 (%)	24.9	8.9	11.6	81.8	3.6	6.2	28.9	24.9	11.6	16.4	23.6	14.2

[注 : (A) コミュニケーション能力の向上、(B) 文法の応用力の向上、(C) 文章力の向上、(D) 文章の作成、(E) 論理的な文章の書き方、(F) 書き言葉の習得、(G) 語彙、(H) 文法、(I) 書き方、(J) 日本語らしさ、(K) 使い分け、(L) テクニック]

3.2.1 学習動機

Q1 に対する「中級前期」「中級後期」「上級」の補講受講者の回答内容をまず比べてみる。「どんな場面で、何をするために「書く」練習をする必要があるか」という質問に対して、受講者のレベルに関係なく、「(D) 文章の作成」と答えた人が最も多く、受講者の書くレベルが高ければ高いほど、「(D) 文章の作成」カテゴリーの回答数が多くなる²。2

番目に多い回答はいずれも「(A)コミュニケーション能力の向上」である。3番目に多い回答として、「中級前期」の受講者は「(C)文章力の向上」、「中級後期」の受講者は「(B)文法の応用力の向上」、「上級」の受講者は「(B)文法の応用力の向上」と「(C)文章力の向上」の両方を答えている。

受講者のレベルに関係なく、「(D)文章の作成」と「(A)コミュニケーション能力の向上」が上位2項目に入っているのは、3.1.1節で述べたように、「書く」練習の学習動機はアカデミックな要素と実用的な要素の両方が関わっていることを意味している。上位3番目の回答内容を見てみれば、「中級前期」と「中級後期」の受講者はそれぞれ1つのカテゴリー、「上級」の受講者は2つのカテゴリーの内容をカバーしている。受講者の「書く」レベルが高ければ高いほど、学習者の日本語知識の広さと深さが増していく学習過程において、学習者の学習目標がより明確になり、学習動機も多様化していると言える。

3.2.2 学習難易度

「難しいと思うことは何か」と聞かれたQ2においては、回答数が多い順で見ると、一番多い回答の中で、「中級前期」の受講者は「(G)語彙」、「中級後期」の受講者は「(G)語彙」と「(K)使い分け」、「上級」の受講者は「(G)語彙」と「(H)文法」をいずれも3割以上の回答率で答えている。どのレベルの受講者にとっても、「(G)語彙」の運用が難しいと見られる。回答数が2番目に多い回答は、「中級前期」の受講者は「(K)使い分け」、「中級後期」の受講者は「(H)文法」、「上級」の受講者は「(K)使い分け」と「(L)テクニク」の両方に集中している。また、3番目に多い回答は、「中級前期」の受講者は「(H)文法」、「中級後期」の受講者は「(J)日本語らしさ」、「上級」の受講者は「(J)日本語らしさ」と答えている。

レベル別の回答数が最も多い前3位の回答内容から、「中級前期」の受講者は3つのカテゴリー、「中級後期」の受講者は4つのカテゴリー、「上級」の受講者は5つのカテゴリーの内容をカバーしていることがわかる。受講者の「書く」レベルが高ければ高いほど、学習の範囲を広げていく中で、学習者が直面している問題は語彙や文法の習得および運用のことだけではなく、如何に文章を書くテクニクを身につけて、言葉や表現をうまく使い分けて日本語らしい日本語を書けるか、といったことにつながっていくと考えられる。

3.3 身分別に見た結果

身分別による補講受講者の回答内容を比較するため、中上級（J500-900）の225名の補講受講者の身分を「学類生」「大学院生」「研究生」「短期生」の4種類に区分した。「学類生」は本学の学群・学類（学士課程）に在学している学生のことを指す。「大学院生」は本学の大学院（修士課程・博士課程）に在学している学生のことを指す。「研究生」とは、

研究生として本学に在学し、本学への正式入学を目指している学生のことである。「短期生」とは、短期留学生や特別交換留学生、特別聴講生、科目等履修生など短期的に本学で勉強している学生のことを一括して指す。属性調査表に身分を記入しなかった回答数は16件あったが、今回の考察対象から除外する。

中上級の補講受講者225名の身分別による回答内容を集計した結果を次の表4に示す。

表4 身分別に見たアンケートの結果

回答内容 回答人数	Q 1						Q 2					
	能力アップ			テクニック			語彙と文法		書き方と表現			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
学類生 (15人)	0	1	4	9	1	1	5	4	1	3	2	2
割合 (%)	0	6.7	26.7	60	6.7	6.7	33.3	26.7	6.7	20	13.3	13.3
大学院生 (53人)	26	3	3	41	1	5	11	12	8	4	9	10
割合 (%)	49.1	5.7	5.7	77.4	1.9	9.4	20.8	22.6	15.1	7.5	17.0	18.9
研究生 (98人)	20	7	15	92	3	4	36	20	11	21	19	11
割合 (%)	20.4	7.1	15.3	93.9	3.1	4.1	36.7	20.4	11.2	21.4	19.4	11.2
短期生 (43人)	7	6	2	31	2	3	10	8	5	7	17	5
割合 (%)	16.3	14.0	4.7	72.1	4.7	7.0	23.1	18.6	11.6	16.3	39.5	11.6
無回答 (16人)	3	3	2	11	1	1	3	2	1	2	6	4
合計 : 225人	56	20	26	184	8	14	65	56	26	37	53	32
割合 (%)	24.9	8.9	11.6	81.8	3.6	6.2	28.9	24.9	11.6	16.4	23.6	14.2

[注 : (A) コミュニケーション能力の向上、(B) 文法の応用力の向上、(C) 文章力の向上、(D) 文章の作成、(E) 論理的な文章の書き方、(F) 書き言葉の習得、(G) 語彙、(H) 文法、(I) 書き方、(J) 日本語らしさ、(K) 使い分け、(L) テクニック]

3. 3. 1 学習動機

「何をするために」という質問に対する回答が示すように、全体的な傾向としてアカデミック系と実用系の2種類の学習動機が見られる。そのうち、アカデミック系の「(D) 文章の作成」の回答率が最も高く、回答者全員の81.8% (うち「研究関係」の回答数は140件 (回答者全員の62.2%)) を占めている。その背景には、受講者の身分から見てみれば、回答者225人中に「学類生」が15人 (7%)、「大学院生」が53人 (23%)、大学院入学を目標とする「研究生」が98人 (44%) あるため、受講者全体の74%の人が現在あるいは近い将来に卒論・修論・博論および研究論文を執筆するために「書く」練習が必要だと意識していると考えられる。このような研究論文を書くためといったアカデミック系の学習動機がある一方、日頃友達や先生と円滑に手紙やメールでのコミュニケーションをとるため、また日常の書類の作成のためにも「書く」練習が必要だという実用的な学習動機も同時に観

察された。

Q1の質問に対する補講受講者の身分別の回答を具体的に見てみれば、回答数が多い順で言うと、受講者の身分に関係なく、回答が最も多いのは「(D)文章の作成」である。2番目に多い回答は、「大学院生」「研究生」「短期生」の場合は「(A)コミュニケーション能力の向上」であるのに対して、「学類生」の場合は「(C)文章力の向上」となる。3番目に多い回答に関してはばらつきが見られた。「学類生」の場合は「(B)文法の応用力の向上」「(E)論理的な文章の書き方」、「(F)書き言葉の習得」が1例ずつあって、それぞれ6.7%の割合でともに第3位を占めている。「大学院生」の場合では「(F)書き言葉の習得」、「研究生」の場合では「(C)文章力の向上」、「短期生」の場合では「(B)文法の応用力の向上」がそれぞれ第3位となる。

受講者の身分に関係なく、「(D)文章の作成」のために「書く」練習をする必要があるという回答が最も多かった理由は大学に留学している学生を調査対象としたことに関係があると考えられる。身分はいずれであれ、来日留学の学生は日頃の学校生活や日常生活の中で、誰にとっても研究論文やレポート、申請書類、履歴書などを書かざるを得ない状況が多々ある。うまく文章を書けるようになりたいということが、受講者が「書く」クラスをとる最大の学習動機と言えよう。

2番目に多い項目に見られる「大学院生」「研究生」「短期生」と「学類生」との回答の違いは、両者の学習環境が異なることに起因するのではないかと考えられる。「学類生」の場合では、本学の留学生センターの授業の他に、本学の学群・学類における「日本語日本事情」コースでも勉強できるし、また、大学生である「学類生」は日頃の学習生活や部活動の中で、周囲がほとんど日本人母語話者であるため、日頃から日常的にコミュニケーション能力が鍛えられていると考えられる。このため、「学類生」にとっては、「書く」クラスで手紙やメールを書くためのコミュニケーション能力を向上させたいという願望が薄いことが推測される。このことは、15人の「学類生」の中に、「大学院生」「研究生」「短期生」が相対的に高い割合で回答した「(A)コミュニケーション能力の向上」という項目を取り上げる人は1人もいないことから窺える。一方、「大学院生」「研究生」「短期生」が「(A)コミュニケーション能力の向上」を第2位で取り上げた理由として、「研究生」と「短期生」の場合ではいずれも正規生ではないため、学校のクラスや研究室に所属されていないのが現状である。「大学院生」は大学院の各研究室に所属されているとは言え、研究室の人の半分以上が外国人であるケースがしばしばあるし、大学生に比べて大学院生の方の学習負担が大きくて、日頃の学習生活の中でコミュニケーション能力が十分に鍛えられていないこと、あるいは先生とコンタクトをとる中でコミュニケーション能力の必要性を認識している自覚があるのではないかと察する。

3番目に多い回答にはばらつきが見られた。「大学院生」の場合では「(F)書き言葉の

習得」、「研究生」の場合では「(C)文章力の向上」、「短期生」の場合では「(B)文法の応用力」が挙げられ、「学類生」の場合では「(B)文法の応用力の向上」、「(E)論理的な文章の書き方」、「(F)書き言葉の習得」が同様な割合で挙げられている。このことは受講生の身分の違いに影響されると考えられる。「大学院生」は日頃から研究論文やレポートを執筆することが多く、論文の作成には「(F)書き言葉の習得」が求められている。「研究生」はこれから受験を受けて大学院への進学を目指す人がほとんどであるため、受験する際に書く小論文やこれからの大学院での勉強に備えるため、「(C)文章力の向上」が求められている。「大学院生」や「研究生」に比べて「短期生」の方は特に受験や研究のための論文執筆といったことが求められていないため、「書く」練習をすることによって「(B)文法の応用力」を向上させたいという学習動機が第3位に上げられていることも理解される。

3.3.2 学習難易度

「難しいと思うことは何か」というQ2の質問に対する補講受講者の身分別の回答内容を見てみると、回答数のカテゴリー別ランキングは異なるものの、「(G)語彙」と「(H)文法」という2つのカテゴリーは身分に関係なくいずれも回答数の上位3位に入っている。それ以外に、「学類生」の場合では第3位は「(J)日本語らしさ」、「大学院生」の場合では第3位は「(L)テクニック」、「研究生」の場合では第2位は「(J)日本語らしさ」、「短期生」の場合では第1位は「(K)使い分け」となっている。このように、Q2に対する回答は回答数の順位も含めて一定のばらつきが見られた。

Q2の質問に対する回答の全体的な傾向として、「(G)語彙」(28.9%)、「(H)文法」(24.9%)、「(K)使い分け」(23.6%)の3つの回答が最も多かった。「文法」の運用が難しいという回答はある程度想定されやすいが、文章の基本的な構成要素である語彙の習得（語彙量の不足や接続詞などの文章用語の用法、漢字の習得）が難しいと答えた人が回答者全員の三分の一に近くおぼえていることは、「書く」クラスのスタンダードを作成する際の一つの重要な参考要素となる。この集計結果から見れば、少なくとも受講者の語彙力を強化する必要があると考えられる。3番目に多い「(K)使い分け」という回答については、話し言葉と書き言葉の使い分け、類似表現の使い分け、文体の使い分けが難しいといったことが述べられているのであるが、学習者に語彙項目や文法項目を習得するための指導を行う際に、場面別や文体別による語彙・文型の使用選択や表現の使い分けについても指導する必要があると考えられる。

4. おわりに

現在、筑波大学留学生センターでは、2010年度に実施した学習者のニーズ調査の結果を参考にしつつ、スタンダードの構築を進めているところである。本稿は、中上級学習者

(J500-900) の「書く」のニーズ調査を報告したものである。カテゴリー別、「書く」レベル、身分別から見た学習者の学習動機と学習難易度を考察した結果は以下のようにまとめられる。

(1) カテゴリー別から見た学習動機および学習難易度

- ・学習動機：アカデミック的な要素と実用的な要素の両方が関わっている。
- ・学習難易度：文章の簡潔さや論理性、構成、書式といった文章力の向上を求める前に、受講者が直面する課題は語彙や文法を習得し、適切に運用することである。

(2) 「書く」レベルから見た学習動機および学習難易度

- ・学習動機：受講者の「書く」レベルが高ければ高いほど、学習者の日本語知識の広さと深さが増していく学習過程において、学習者の学習目標がより明確になり、学習動機も多様化している。
- ・学習難易度：受講者の「書く」レベルが高ければ高いほど、学習の範囲を広げていく中で、学習者は語彙や文法の習得および運用のことだけではなく、文章を書くテクニックを身につけて、言葉や表現をうまく使い分けて日本語らしい日本語を書けることも求めている。

(3) 身分別から見た学習動機および学習難易度

- ・学習動機：研究論文を書くためといったアカデミック系の学習動機がある一方、日頃友達や先生と円滑に手紙やメールでのコミュニケーションをとるため、また日常の書類の作成のためにも「書く」練習が必要だという実用的な学習動機も同時に観察された。
- ・学習難易度：文法とともに語彙を挙げる者が多いことから、受講者の語彙力を強化する必要がある。また、学習者に語彙項目や文法項目を習得するための指導を行う際に、場面別や文体別による語彙・文型の使用選択や表現の使い分けについても指導する必要がある。

本報告は以上に述べた「書く」場合の学習者の学習動機や学習上に困難を抱えている問題点を洗い出すことによって、学習者の日本語力を規定する基準や到達目標を設定する際の参考材料になる。今回のニーズ調査で得られた学習者の「声」を今後は是非活かして、筑波大学留学生センターにおける日本語教育の効率化および発展に役立てたい。

注

- 1 オンラインで利用できるネット上のソフトである。中国語と英語で回答を書いたアンケートは中国語のサイトにある“词分析工具” (<http://www.zhongguosou.com/zonghe/cipintongji.aspx>) を利用し、日本語で回答を書いたアンケートは日本語のサイトにある「クレフキーワード密度チェッカー」 (http://seo.design.io/keyword_chk) を利用す

ることとした。

- 2 表3が示すように、「(D)文章の作成」というカテゴリーの中で幾つかの下位カテゴリーが設けられている。一人の回答者が複数の下位カテゴリーの内容を言及する場合は複数の回答として計算されるため、回答数が回答者の人数を上回ることがあり得る。

本研究は平成22年度筑波大学「革新的な教育プロジェクト支援経費」の助成を受けている。